

# 第4回

## 津ふるさと学検定問題

と き 平成27年10月25日(日)  
と ころ 津商工会議所

### 受検に際しての連絡・注意事項

- ①携帯電話の電源はお切りください。
- ②机の上には、受検票 筆記用具のみを準備下さい。
- ③配布された封筒に、ご自分の宛先（〒番号・住所・氏名）を記入して下さい。  
氏名の後に「様」まで記入のこと。
- ④開始の合図までは、問題表紙を開けないで下さい。
- ⑤解答用紙に受検番号と受検者名の記入を忘れないようにして下さい。
- ⑥解答は、別紙の「解答用紙」に記入して下さい。
- ⑦問題の『 』が○×を問う事になっています。
- ⑧開始から30分間の途中の退出はできません。
- ⑨トイレ等に行かれる場合は挙手して下さい。係が案内します。
- ⑩問題に関する質問は受け付けません。
- ⑪終了の合図で、解答用紙は、封筒の中に入れて下さい。
- ⑫問題用紙は、お持ち帰りいただいてもかまいません。
- ⑬次に該当する行為をした受検者は、その場で退場とし、答案の採点は行いません。受検後に不正行為等が判明した場合も合格を取り消します。
  - 1、他の受検者への迷惑行為
  - 2、検定委員の指示に従わない場合
  - 3、その他の不正行為
- ⑭検定終了後、景品の抽選会を行います。
- ⑮合格発表方法  
解答用紙、認定証を同封の上、1ヶ月以内に郵送にて行います。

- 1 明治後期、安東地区納所町出身の田中常次郎をリーダーに、三重県人が北海道富良野原野を開拓し、今の上富良野町のもとを築いた。これが縁で安東小学校と姉妹校提携をしているのは『上富良野西小学校』である。
- 2 観海流は嘉永5年(1852)忍藩浪人・宮発太郎信徳の水泳術が津藩によって採用され翌年道場を開設し創始されたもの。開祖・宮が去った後、初代家元になったのは『山田慶介』である。
- 3 津市中心市街地の東部、寿町や乙部には津藩に関係が深い寺院が多くあるが、一番古い歴史を持つお寺は『上宮寺』である。
- 4 長谷山北麓の分部地区は、工藤長野氏の一族、分部氏三代が本拠としていた所。分部氏は江戸初期に近江国大溝2万石に転封となるが、その前に城主を務めた伊勢国の城は『伊勢上野城』である。
- 5 石水博物館の命名者は川喜田半泥子。「石水」の由来は2説あり、一つは岩田川の別称。もう一つは川喜田石水から。川喜田石水は半泥子の『曾祖父』である。
- 6 津藩士・堀江鍬次郎は我が国写真術の開祖の一人と讃えられる。彼が上野彦馬と共に藩校での授業のために作成、出版した理科教科書は『舎密局必携』という。
- 7 久居元町出身の上野英三郎博士は、大正14年東京帝国大学で講義中に倒れ、急逝した。博士とハチ公と一緒に暮らした歳月は『3年半』だった。
- 8 三重大学は昭和24年、三重師範学校、三重青年師範学校、三重農林専門学校を母体に発足したが、現在は『人文・教育・医・生物資源の4学部制』である。
- 9 大坂冬の陣のきっかけとなった京都方広寺の鐘の銘文を起草したのは、南禅寺の清韓長老。子孫が建てた彼の墓碑が乙部の『西来寺』にある。
- 10 文久2年、津藩の海防政策の一環として2箇所にお台場(砲台)が造られた。それは贅崎と『塔世西裏』である。
- 11 安濃津城の籠城戦では、城主富田信高の正室が甲冑に身を固め、城外で討ち死に寸前の夫を救ったという武勇伝が有名。この正室の父親とは『宇喜多忠家』である。
- 12 藤堂高虎は弘治2年(1556)1月6日、近江国の郷土であった父虎高、母とらの次男として生まれ、幼名は与吉。生まれた場所は現在の滋賀県『甲良町』である。
- 13 関ヶ原の戦功で伊予半国を領有した高虎は、宇和島、大洲にかわる新拠点の今治築城で、後の天守建築のモデルとなる革命的な工法を編み出し、『層塔型天守』と呼ばれている。
- 14 高虎の城づくりの特色として、広い水堀、高石垣、枡形虎口、鉄門、新型天守、方形の本丸敷地などがあげられるが、『多聞櫓』の多用も代表的なものである。
- 15 最晩年の高虎は視力を失い江戸城に登城出来なくなったが、時の大御所は高虎のために曲がった廊下をまっすぐにし、駕籠に乗ったまま屋内に入る事を許し、将軍もこれに倣った。この大御所とは『家康』である。
- 16 寛政一揆後の藩政建て直しに自身の歳費を蓄え、それを原資に藩校有造館を創設した名君は『10代高兌(たかさわ)』である。

- 17 藩校有造館の朱塗りの門が戦災を免れ、お城公園内に移設保存されている。この門は『入徳門』といわれている。
- 18 津城は外堀に3か所の出入口門があった。1つは江戸に向けての京口門、もう一つは伊賀上野に向けての伊賀口門であり、城の南側にあった残る一つは『参宮口門』である。
- 19 お城西公園内に切支丹として処刑された藩士『中島長兵衛』の碑がある。
- 20 寛政8年(1796)に起こった寛政一揆では首謀者として5名が捕えられた。2名が牢死、3名が塔世河原で処刑された。刑死の3名とは、谷杵組合頭・町井友之丞、八対野村庄屋・多木藤七郎および川口村庄屋の『森惣左衛門』である。
- 21 和訓栞は時代の先端をいく画期的な国語辞典で約21000語を収め、語の配列の順序は語の『第2音』まで50音順だった。
- 22 土清は著書「読大日本史私記」の中で水戸藩が編纂した「大日本史」の誤りを指摘した。これが大きな波紋を呼び土清は藩から『所払い』の処分を受けた。
- 23 谷川土清は福蔵寺の墓地に葬られ、「淡斎谷川土清之墓」とある。墓碑は国の指定史跡で、その隣には『長男・土逸』の墓もある。
- 24 土清は後の世に自分の考えが誤って伝えられることを防ぐために古世子明神の境内に反古塚を築き『下書き類』を埋めた。
- 25 谷川神社はもとの古世子明神の社の跡地に建っているが、創建されたのは『昭和7年』である。
- 26 納所町にある寺の本堂「御倉堂」は、寛永11年(1634)伊勢神宮の古材により建立された。神宮の神田から収穫される米の収納所となっていた。この寺を『納所寺』という。
- 27 昔の一身田の人は『専修寺の鐘』で時刻を知った。
- 28 県の史跡名勝に指定されている専修寺庭園「雲幽園」の一角には茶室「安楽庵」がある。茶室の作者は『千利休』である。
- 29 専修寺の梵鐘は津の名工・辻越後守重種が慶安5年(1652)に制作したものであるが、その依頼者は『藤堂高次』である。
- 30 天正19年(1591)に生まれ、伊勢上野城から大坂冬の陣・夏の陣に出陣し本多忠政の先鋒として活躍したのは、『分部光勝』である。
- 31 河芸町三行・久知野から鈴鹿市境にかけての丘陵地帯に古墳時代から奈良時代にかけての窯跡がたくさんあるが、この窯跡群は『黒田古窯跡群』と呼ばれている。
- 32 河芸町久知野地区の式内社服織神社の祭神は農業、養蚕、機織りを奨励した大日靈貴尊(おおひるめむちのみこと)、すなわち『天照大神』である。
- 33 河芸町「杜の街」の中央付近で、標高30m程の丘陵頂上部分に円墳がある。この古墳は、『千松谷古墳』である。
- 34 中世の説話集「古今著聞集」の中の一話。伊勢国別保の漁師の網にかかった人魚のような生き物を、献上されたが、気味悪がって受け取らなかった人物、前刑部少輔(さきのぎょうぶのしょう)とは『平清盛』である。

- 35 河芸町中別保地区にある海上山松林寺は、現在は真宗大谷派の寺であるが、創建当時は天台宗であった。本尊の『薬師如来立像』は平安後期～鎌倉時代に造られたものと言われている。
- 36 芸濃町林地区の普門寺が本山の仁和寺に貢物を納めた時、荷車に立てた札が数枚残っている。この札には菊の紋章と『宮中御用』の文字が書かれている。
- 37 芸濃町椋本中町にある中世の創建と言われる寺院。三重四国八十八所・東海四十九薬師の霊場で、室町時代の涅槃像や寛文8年(1668)建立と伝わる山門がある寺院は『西方寺』である。
- 38 芸濃町雲林院の長徳寺は曹洞宗の古刹で、雲林院氏の菩提寺。この寺には「嘉吉二壬戌年(1442)」などの古位牌が多数あるが、有名な剣豪『宮本武蔵』の位牌もある。
- 39 安濃町の大城遺跡で平成10年、日本最古といわれている刻書土器が発見された。その高杯に刻まれた文字は「奉」と読むのが妥当とされ、『弥生時代』のものである。
- 40 安濃町の廃寺となった仲楽寺に祀られていた県指定文化財「阿弥陀如来坐像」は平安時代の作である。現在は『太田区公民館』に安置されている。
- 41 安濃町太田地区の西念寺にある「観心十界曼荼羅図」は保存状態が良好で佳品と評されている。西念寺のこの図は『鎌倉時代』のものである。
- 42 美里町平木地区の集会所の近くにある、豪商の寄付などにより建てられた美里地区最大の常夜灯は、もともと『長野宿』にあったものを移築した。
- 43 平安時代の9世紀前半、美里町北長野地区で弘法大師空海が薬師如来の石仏を刻み、小さなお堂を建てたのが始まりとされるお寺は『龍光寺』である。
- 44 美里町南長野地区の東端、長野川にかかる立岩橋のすぐ下流に巨大な岩2枚が支えあうように立っており、古くから夫婦信仰がある。岩には、『経文』が刻まれている。
- 45 美里町柳谷集落の巨大な岩の上にある梅林寺。寺にある弘法大師の作といわれる仏像は、日本三大『虚空蔵菩薩』の一つと伝えられている。
- 46 美里町日南田地区で、石に彫られた地藏さんのある地域を「石取神山」という。かつて、この地から『津城』の建築用に石材を切り出した。
- 47 美杉町三多気の眞福院境内入口に石造りの鳥居が建立されている。神仏習合の名残とされる、この鳥居の形式は『神明鳥居』である。
- 48 美杉町太郎生地区の「日神(ひかわ)石仏群」は、鎌倉末期から室町初期の作で県指定文化財。この石仏群に混じり五輪塔の優品が2基あり、平家の公達『六代』の墓と伝える。
- 49 明治2年(1869)12月、長崎のキリシタン約3000人が全国に配流(流罪)となった。津藩は155人預かった。そのうち75人を収容したのは白山町大三の代官所『大村詰』である。
- 50 久居陣屋は、現在の久居中学グラウンドから高通公園にかけての一带にあった。大手門は、現在の『久居郵便局』辺りだった。

- 51 式内川併神社は、戦国時代に荒廃したが、寛永2年(1625)現在の本殿が完成。拝殿は元禄4年(1691)に完成し、竣工式は時の久居藩主『2代高堅』も参列し盛大に行われた。
- 52 久居桃園地区では、雲出川による水害に悩まされ高台に移転した集落もあった。その集落とは『新家』である。
- 53 松尾芭蕉は、久居城下に姉と思われる親族が住んでいたため、時々足を延ばし『超善寺』を定宿にしていたといわれる。
- 54 久居元町の賢明寺の山門は法隆寺を模して造られ、朝廷や北畠氏とも縁が深く、この寺は天平年間『行基』の創建とされている。
- 55 木造氏は信長の伊勢侵攻に信長軍の案内役をすることになるが、最期は秀吉軍の戸木城攻めで城を明け渡すことになった。さて、この戦いの秀吉軍の総大将は『滝川一益』である。
- 56 榊原小学校の南にある城山は、榊原信濃守興経の古城跡として知られる。城跡の一部としてここで現在確認されている唯一のものは『井戸』である。
- 57 江戸時代、この地方には津藩と久居藩、それに紀州藩の飛び地もあった。榊原は『久居藩』の領地だった。
- 58 榊原の射山神社はかつて、貝石山を御神体とし現在の場所は遙拝所だった。約400年前に現在地に社殿を建て、遷座を行ったのは『榊原氏』だった。
- 59 三重海軍航空隊(通称予科練)は教育訓練の部隊だったので、飛行訓練に『ゼロ戦』が配備されていた。
- 60 香良洲町にあった三重海軍航空隊(通称予科練)が使っていた兵舎は、戦後『役場』に利用された。
- 61 浄土宗系の聖典「往生要集」の著者、恵心僧都・源信は夜になると光る大木から願いを込めて、6体の阿弥陀如来像を彫ったという故事がある。それにちなんだ六阿弥陀巡りが津にもあった。光背に一文字ずつ刻んだ仏像のうち「阿」の字の安置されているのが『八町六阿弥陀堂』である。
- 62 「宿なし興道」の異名をとった昭和の名僧(曹洞宗)澤木興道は、幼少期に両親を亡くし、一身田の澤木文吉の養子となったが、元々の出身地は『分部町』である。
- 63 津市のPRキャラクターとして活躍中のシロモチくんの住所は津市丸之内5番地の1の津城跡内で、『名誉住民票』が交付されている。
- 64 初馬寺(蓮光院)は、津駅東口近くにあり、御本尊は聖徳太子が42歳の厄年に自ら刻んだと伝わる馬頭観音。同寺には重要文化財の「大日如来」と『阿弥陀如来』もある。
- 65 高虎を祀る高山神社には、安本亀八作で津市指定文化財の大きな絵馬がある。これは、神功皇后と武内宿禰の伝説により、藩主の武運長久を願ったもの。奉献したのは『名張』の町民である。
- 66 専修寺如来堂屋根の妻にある「鶴」の彫刻は、伝承では左甚五郎の作だが、本当の作者は京都の名工『丸山新之丞』である。

- 67 河芸町中別保地区の八雲神社に江戸時代の漁業の様子を描いた木造着色の絵馬が保存されているが、『地曳き網』をしている様子が描かれている。
- 68 芸濃町林地区には明治期と大正期の洋風建築の特徴を融合させた建物がある。木造二階建てで、角地の立地を生かして角部に玄関ポーチが張り出し、大正モダンを感じさせる。この建物の元々の用途は『村役場』である。
- 69 江戸時代には民衆の読み書き能力も高まり、清水、安部など安濃郡を中心に伊勢13郡の人たちが関わった「いせさくら」という『川柳』の本が残っている。
- 70 安濃町内多にある長源寺に伝わるは霊異譚。寺の縁側で昼寝をしていた旅人と地元の人魂が入れ替わり大慌てとなったが、また昼寝をして起きてみると元通りになったという。この旅人は『日向』の人である。
- 71 美杉町下之川地区仲山神社の奇祭「牛蒡祭」の起源は室町時代と伝える。クライマックスでは木製の男性のシンボルの神輿と、藁で形づくった女性のシンボルの神輿が、境内でめでたく合体し、子孫繁栄・五穀豊穰を祈願する。行われるのは毎年『2月11日』である。
- 72 円空は鉦彫りを中心に生涯12万體もの仏像を作った。円空の類例の少ない極初期の大日如来坐像（市指定文化財）は、白山町二本木地区の『浜城観音堂』に安置されている。
- 73 文政8年(1825)川口村の百姓・久助が白山比咩神社（川口）の西南にある風呂谷から『環頭大刀（かんとうのたち）』を発見している。
- 74 一志町波瀬地区にある波氏神社の社宝に2体の蔵王権現がある。両像がもとあったのは『矢頭神社』である。
- 75 一志町波瀬地区の御前山には昔、この山に平家盛の妻の御霊を勧請し竜宮に雨乞いの願をかけたところ、旱魃を免れたという伝説がある。この妻の名を『辰御前』という。
- 76 久居桃園地区川方町の栄松寺には正和3年(1314)8月建立の石仏(県指定文化財)があるが、寺を訪れた人の眼を引くのは高くそびえた『松』の木の門。
- 77 榊原温泉の守り神、射山神社の入口にある手水所「榊の井」は「長命水」と呼んでいる。この水に『榊を一夜浸すと長持ちした』ことがその由来である。
- 78 香良洲には予科練各期の戦没者を祀る慰霊碑がある。毎年5月第3日曜日に、予科練OB、遺族、自衛隊の隊友会の方々が慰霊祭を行っている。ここを『若桜霊園』という。
- 79 安濃川は江戸時代当初、軍事目的から橋が架けられなかった。延宝3年(1675)に架けられた橋は幕末までは土橋で、河原に一度降りて渡った。この橋は『御山荘橋』である。
- 80 JR名松線は松阪駅から伊勢奥津駅まで43.5kmである。名松線の名前は、2つの都市の頭文字をとって名付けられた。両都市とは松阪と『名張』である。
- 81 かつては海底で、地層からサメの歯や貝の化石などが発見されており、県指定天然記念物となっているのが、榊原・美里両地区にある『貝石山』である。

- 82 昭和26年の津の地図を見ると岩田川につながる川が西来寺の前まで続いている。現在は埋め立てられ、その一部が残っている。城下町津を偲ばせるこの川の名は『堀川』である。
- 83 津城南側の外堀は、満潮時には岩田川から沢山の魚が入った。特に多かったのは『鯛』である。
- 84 故郷に帰った土清は医業を継ぐと同時に家塾「洞津谷川塾」を開いた。その「洞津」とは『安濃津』という意味である。
- 85 寺内町のある一帯は早くから人が住み着いていたようで弥生式土器が『向拝前』で発掘されている。
- 86 津市を通る伊勢別街道で今も昔の面影を最もよく残している宿場町。街並みは2か所で直角に折れ曲がり、問屋場や高札場のあった所は道幅が広く、ゆるい坂道の両側には連子格子の入った間口の広い木造家屋が四十数軒も軒を連ねているこの宿場は『楠原宿』である。
- 87 芸濃町林地区の津関線と旧伊勢別街道との交差点に安永5年(1776)建立の道標を兼ねた常夜燈がある。竿には「安永五丙申歳六月」「御神燈右さんぐう道」『左り関道』と彫られている。
- 88 安濃町のある地区ではかつてこんこんと湧き出る泉が多かったので「泉村」と呼ばれていたが、津藩主藤堂家の官位をはばかり改名した。その地区とは『清水』である。
- 89 国道163号は、津市中心部の岩田橋北詰を起点として、新長野トンネルを通過して伊賀市方面に向かっている。終点は『木津』である。
- 90 伊賀街道の一番の難所である長野峠は、寛文13年(1673)の測量によると、長さは「1里9町(4.8km)」である。測量したのは『伊能忠敬』である。
- 91 美杉の名峰・大洞山は雌岳(985m)と雄岳(1013m)からなる連山。雌岳の山頂近くにある「おおぼらスカイランド」には『天文台』もある。
- 92 美杉町奥津地域の伊勢本街道から八幡橋を渡り7kmほど雲出川を遡れば若宮八幡神社が鎮座し、川上さん・若宮さんと親称されている。修験者達が行場としている境内奥の滝は『かわかみの滝』という。
- 93 白山町の白山比咩(しらやまひめ)神社には白鷺伝説がある。鎮徳上人の笈(おい)の中から7羽の白鷺が飛びたち舞い降りた7か所に、それぞれ白山神社を創建した。7か所は、松阪の飯福田(いぶた)、美杉の竹原、白山町の川口、家城、山田野、八対野と、あと一つ『倭』である。
- 94 青山高原は布引山地の笠取山から南北約10kmに広がる高原で、『室生赤目布引国定公園』の東部に位置する。
- 95 矢頭山のふもとの矢頭中宮公園には、県の天然記念物に指定された大木、幹まわり約9m、高さ約40m、樹齢約400年の『矢頭の大檜』がある。
- 96 香良洲町の字の一つに地家地区がある。その昔北畠氏の出城があり、家臣の矢野氏の居城と言われ、村の中心地であったため、現在でも別名『本村』と呼ばれている。

- 97 水源地への産業廃棄物処分場の立地は社会問題となるケースが多い。昭和63年、当時の津市・久居市・美里村が相次いで公布し全国のモデルとなった画期的な条例は『水道水源保護条例』である。
- 98 伊勢街道沿い、上浜町の津市指定有形文化財「阿部家住宅」。主屋の屋根に卯建が上がり、通りに面した千本格子、荒格子、大戸、雨除けのおおだれ、高塀などが典型的な大店の商家建築の風格、風情を今に残す。江戸時代の元々の商売は『木綿問屋』である。
- 99 津の海岸で京阪神で最も知名度が高いのは御殿場海岸。地名は藩政時代、藩士の遊漁地で藩主の休憩用御殿もあったことに由来するが、一帯のリゾート開発に伴い命名されたのは『大正14年』である。
- 100 河芸町一色地区は美味しい伏流水に恵まれ昔から醸造業が盛んで、最盛期には3軒の造り酒屋があったが、現在は『小川本家』1軒になってしまった。
- 101 安濃町安濃・内多・清水地区などで、江戸時代から作られていた特産品で、明治28年の「洞津美也芸」の挿絵に津名産の「なすび団扇」「阿漕焼」と共に描かれているのは『津緞子』という織物である。
- 102 クリーンな再生可能エネルギーとして注目される風力発電。笠取山周辺の美里町地区内では、2006年に運転を開始し、19基が稼働している。運営主体は『津市』である。
- 103 平成12年6月16日、97歳で崩御された香淳皇后。いつも穏やかな笑みを浮かべられ国民的人気も高かった。本葬までご遺体が安置された殯宮（ひんきゅう）に材色の白さを理由に『美杉町の杉』が使われた。
- 104 一志町は古くから養蚕が盛んで、町内には2つの大きな製糸工場があった。「高岡製糸」と『川合製糸』である。
- 105 かつての一志町の特産品で、旧三重県庁舎の玄関（明治村に移築保存）など建築用材としても使われた石の名は『井関石』である。
- 106 久居瓦の全盛期には53軒もの瓦屋があり、昭和40年代まで瓦を焼く独特の景観があった。これらの窯は『だるま窯』と呼ばれていた。
- 107 榊原には無料で利用できる足湯が2か所ある。一つは榊原温泉郷おもてなし館、もう一つは『榊原温泉郵便局』である。
- 108 香良洲町の商業形態の一つに行商がある。特に戦後、近鉄の一番電車を利用して、大阪・奈良・京都方面に行商に行く集団は名物で、『カンカン部隊』と呼ばれた。
- 109 B級グルメ「津ぎょうざ」の定義は、揚げ餃子で、大きな皮を使用すること。皮の直径は『15cm』である。
- 110 「天むす」は津が発祥の地。セットにしてある付け合わせは『小女子の佃煮』である。
- 111 津藩家老・中川蔵人の天保12年(1846)の日記には、津の伝統の餅が掲載されている。その餅とは『けいらん』である。
- 112 レストラン東洋軒の名物メニューであるブラックカレーは、初代オーナーシェフ猪俣重勝が苦心の末に完成させた。プロデュースしたのは『横光利一』である。



- 113 平治煎餅でおなじみの阿漕平治の忘れ笠。江戸時代にヒットし、平治の忘れ笠を全国区にした作品は、義太夫『勢州阿漕浦鈴鹿合戦』である。
- 114 磨砂の採掘跡を利用した津市半田の温泉施設。年間を通して18～20度の快適な洞窟内で山海の料理が堪能でき、近年では県外から若い世代の来客も多い。この施設は『磨洞温泉清風荘』である。
- 115 国指定史跡・谷川土清旧宅近くのお菓子屋。「土清まんじゅう」「たまむし」「和訓の葉」等のお菓子を復元させたのは『大岡屋』である。
- 116 一身田の地元で人気のゆるキャラ「しん坊くん」をデザインしたドラ焼きを置いている老舗の和菓子屋は、『春乃舎菓子店』である。
- 117 古くから美里町内で田の畦などに栽培されていた大豆で、大粒で味噌に加工すると甘みが強いなどの特徴を持つ品種は、『美里豆』である。
- 118 JR伊勢奥津駅近くの古民家を地元商工会の女性有志が借りて、土日・祝日に開いて弁当や季節商品を販売している来訪者のおもてなしが目的の施設は『かわせみ庵』である。
- 119 伊勢本街道の飼坂峠には明治の中頃まで茶屋があった。明和5年(1768)の「幸講定宿帖」には「池田屋清吉茶屋二軒あり〇〇餅と小豆のもちうる(中略)下女あまた出とめると記している。この〇〇餅とは『よもぎ餅』である。
- 120 白山町元取地区には慶応2年(1866)から変わった餅つきが伝えられている。たくさんの小棒で突き固める餅つきの名は『小棒つき』である。